

[特集 今 図書館を考える] 「産業理工学部図書館の 現状と課題」

近畿大学産業理工学部
学術情報センター長
長谷川 徹也

1. はじめに

大学の図書館で印象に残っているのは、アイルランド最古の大学であるトリニティ・カレッジの図書館である。世界で最も美しいといわれる中世初期の大型福音書装飾写本である「ケルズの書」をガラス越しに見た後、2階に上がると全長約65メートル、通常の建物の高さの2階分まで整然と並べられた図書を見ることができる。18世紀に建築されたロングルームと呼ばれるこの部屋の書物の背表紙を見ているだけで、アイルランドの歴史の一端を感じ取ることができる。同様に、書物の量に圧倒されたのは東大阪市にある司馬遼太郎記念館である。近畿大学本部キャンパスの徒歩圏内にあり、2001年に開館した建物の地下1階から3層吹き抜けの書架に個人の蔵書の一部が並べられている。展示されている約2万冊という蔵書の中には、読んだことのある本、読まずに終わった本など自身の過去を振り返りながら時を過ごすことができる。いずれも書物を手に取って見ることは出来ないが、背表紙を見ているだけでも想いを巡らせることができる場所である。

近年、書物に囲まれた図書館が大きく変わりつつある。大学設置基準第三十八条では、「大学は、学部の種類、規模等に応じ、図書、学術雑誌、視聴覚資料その他の教育研究に必要な資料を、図書館を中心に系統的に備えるものとする。」とされ、資料の収集、整理及び提供を行うほか、情報の処理・提供のシステムを整備して学術情報の提供に努め、他の大学の図書館等との協力を努めること、図書館にはその機能を十分に発揮させるために必要な専門的職員その他の専任の職員を置くこと、大学の教育研究を促進できるように適当な規模の閲覧室、レファレンス・ルーム、整理室、書庫等を備えるものと定めている。文部科学省・学術情報基盤実態調査による8学部以上を有する私立大学の経費の推移をみると、平成21年度に雑誌の経費と電子ジャーナルの経費がほぼ同額になり、それ以降電子ジャーナルの経費が雑誌の経費を上回っている。学会誌の電子化が進み、電子図書も導入され、産業理工学部の図書館でも学会誌が並べられていた書架には空きが目立つようになった。電子ジャーナルは図書館以外からもインターネットを使って読むことができることもあり、平成22年度から平成24年度までの近畿大学の各図書館の入館者数は、産業理工学部と生物理工学部を除いて毎年減少している。

大学の教育研究が電子的環境を強めつつある環境の変化に対して、科学技術・学術審

議会の学術情報基盤作業部会が平成22年に「大学図書館の整備について（審議のまとめ）」変革する大学にあつて求められる大学図書館像」を公表し、平成24年には「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(答申)において、学修支援環境の整備についての課題として、主体的な学修を支える図書館の充実や開館時間の延長などをあげている。

そこで、「平成24年度近畿大学中央図書館年次報告書」(平成25年9月)に記載されたデータを中心に産業理工学部の図書館の現状を報告し、大学に求められている図書館像から産業理工学部図書館の課題についてまとめた。

2. 産業理工学部図書館の現状

2-1 産業理工学部の図書館概要

近畿大学では中央図書館のある本部キャンパス以外に、各キャンパスに学部図書館が設置されている。産業理工学部の図書館は4号館の1階と2階にあり、2階入口から入館する。館内は開架式で自由に本を手にとって読むことができる。

入口前には平成22年から常時ブックリユースのワゴンを置き、図書館カウンター前には図書館資料の検索用コンピュータとコピー機を設置している。入口横にブラウジングコーナーがあり、新聞、一般雑誌、旅行・料理関連、DVD・CDを置き、AVブースを設けている。平成23年度には館内で開講される無料の英会話教室に対応させて語学コーナーを設け、英語教材、TOEIC関連図書、語学用CDなどを置いている。入口に近い書架横には時機に合わせた本などを展示するコーナーを設け、新着図書専用の書架を置いている。入口に近い書架にはシラバス掲載参考図書、資格取得関連図書、就職関連図書を配架し、学部の「資格取得奨学金制度」に該当する資格資料には「奨学金シール」を貼付し利用の促進をはかっている。閲覧スペースの近くには参考図書の書架を設置し、新書、文庫、そして学術雑誌は専用の書架に配架している。

図書館事務室の裏にはゼミ室が3部屋あり、ブラウジングコーナーの横には地域資料室として旧産炭地に立地している本部周辺地域の関連図書や資料を集めた部屋を設けている。これらの部屋は学生や教職員が申請して自由に利用することができる。

1階の書庫には館内の階段を使って行くことができる。主に製本雑誌、洋書、そして使用頻度の低い図書を配架し、閲覧スペースと検索用コンピュータを設置している。

平成21年には教職員を対象にWebサービスであるマイ・ライブラリを利用することで貸出・予約、文献複写依頼、学生と院生を対象とした購入希望図書の受付等の手続きが可能となり、平成22年度からはメールによる貸出資料の返却期限通知の運用をはじめている。平成26年3月に中央図書館システムと統合し、本部図書館と同等の図書館サ

ビスを受けることが可能となり、館内で無線LANサービスもはじめた。中央図書館にある図書資料は、請求後早ければ翌日には無料で本学部が届く。

中央図書館では平成26年から平日と土曜日は8時45分、試験期間は8時30分から開館し22時閉館としている。日曜・祝日は10時から18時までである。本学部の図書館は9時に開館し、平日は19時まで、土曜日は13時までで、日曜・祝日は閉館している。平成24年度の実績では本学部の図書館の開館日は他のキャンパスに比べて最も少ない271日である。

2-2 所蔵統計及び受入資料数

近畿大学図書館の平成25年3月31日現在の図書・資料の所蔵数を表1に示す。

近畿大学では和書140万3541冊と洋書89万1294冊、合わせて229万4835冊を所蔵している。本学部ではそのうちの約7%に相当する和書12万6060冊、洋書3万9858冊、計16万5918冊を所蔵している。和書と洋書の占める割合をみると、近畿大学全体では蔵書の61%が和書であるのに対して本学部では76%で、生物理工学部、工学部に次いで和書の占める割合が多い。学生一人当たりの蔵書数はいずれのキャンパスの図書館も私立大学の平均である42・0冊よりも多く、近畿大学全体では70・8冊である。最も多いのが医学部の237・2冊、次いで工学部が113・4冊で、本学部は6つのキャンパスの中で3番目に多い98・1冊である。

各キャンパスの図書館で所蔵している雑誌の種類をみると、中央図書館が最も多く日本語が7964種類、外国語が6409種類で合わせて1万4373種類である。本学部では日本語362種類、外国語558種類の計920種

表1 所蔵数

	蔵書冊数			学生一人 当たり 蔵書数 (平成24年度実績)	雑誌種類数			電子ジャーナル タイトル数	視聴覚資料
	和書	洋書	合計		日本語	外国語	合計		
中央	844,039	637,533	1,481,572	64.4	7,964	6,409	14,373	37,839	5,148
農学	96,477	42,255	138,732	48.8	3,428	1,217	4,645	37,678	608
医学	75,603	101,609	177,212	237.2	1,108	1,635	2,743	35,768	414
生物理工	68,688	20,130	88,818	45.5	297	277	574	35,519	1,954
工学	192,674	49,909	242,583	113.4	588	509	1,097	35,519	2,015
産業理工	126,060	39,958	165,918	98.1	362	558	920	35,535	1,967
合計	1,403,541	891,858	2,294,835	70.8	13,747	10,605	24,352	38,432	12,106

※平成24年度近畿大学中央図書年次報告書より作成、電子ジャーナルタイトル数は平成24年4月1日現在、それ以外は平成25年4月1日現在。

類で、生物理工学部の574種類に次いで少ない。外国語雑誌に比べて日本語雑誌の種類が少ないのは医学部と本学部だけである。平成24年4月1日現在の本学部で利用できる電子ジャーナルのタイトル数は3万5535である。中央図書館のタイトル数が最も多く3万7839であるが、タイトル数の少ないキャンパスでも3万5519ありその差は小さい。

産業理工学部の視聴覚資料数は1967で、近畿大学全体の16%を所蔵している。視聴覚資料の区分をみると55%がビデオテープで、次いでCD・LD・DVDが23%となっている。大学全体では視聴覚資料に占めるCD・LD・DVDの割合は41%、ビデオテープが26%である。本学部の視聴覚資料は学生数に対して最も多いものの、CD・LD・DVDの数は生物理工学部や工学部の半分以上で、視聴覚資料の多くをビデオテープが占めている。

平成24年度の年間受け入れ資料数を表2に示す。

平成24年度の近畿大学の受入図書は和書3万4283冊と洋書7038冊、合わせて4万1321冊である。そのうち購入したのは和書が3万1077冊、洋書が6125冊である。本学部の受入図書は和書2314冊と洋書417冊、合わせて2731冊で、そのうち購入したのは和書2184冊、洋書404冊である。受け入れ図書に占める和書の割合は本学部では85%で、近畿大学全体では83%である。平成22年度から平成24年度まで大学全体で毎年4万1321冊から4万5013冊を受け入れているが、本学部では平成22年度が599冊であったのに対して平成23年度と24年度はそれぞれ3201冊、2731冊と大きく増えている。

年間受入雑誌の種類数をみると、中央図書館では日本語が1749種類、外国語が867種類で、そのうち日本語772種類、外国語768種類を購入している。本学部では日本語が399種類、外国語が30種類で、そのうち日本語146種類、外国語29種類を購入

表2 年間受入資料数（平成24年度）

	図書			雑誌種類数			新聞		
	和書	洋書	合計	和書	洋書	合計	日本語	外国語	合計
中央	21,083	4,532	25,615	1,749	867	2,616	89	11	100
農学	3,212	507	3,719	532	125	657	23	1	24
医学	1,288	136	1,424	384	125	509	7	2	9
生物理工	2,646	794	3,440	185	95	280	10	2	12
工学	3,740	652	4,392	166	115	281	8	1	9
産業理工	2,314	417	2,731	399	30	429	14	1	15
合計	34,283	7,038	41,321	3,415	1,357	4,772	151	18	169

している。平成22年度から平成24年度までの近畿大学全体の受入雑誌の種類数の推移をみると、日本語雑誌が6%減であったのに対して外国語雑誌は24%減と大きく減っている。本学部では日本語雑誌の種類が11%減であるのに対して外国語雑誌は69%減で、近畿大学の中で外国語雑誌の受け入れが最も少ない。

受入新聞種類数は中央図書館で日本語89種類、外国語11種類であるのに対して、本学部では日本語14種類、外国語1種類である。日本語の新聞の種類は中央図書館、農学部に次いで多い。外国語新聞に関しては医学部と生物理工学部が2種類を受け入れているが、中央図書館以外の他のキャンパスでは1種類である。

2-3 利用統計

入館者数並びに館外貸出冊数を表3に示す。

平成22年度から平成24年度までの入館者数の推移をみると、近畿大学全体では平成22年度123万8209人であったものが平成24年度には9%減少して112万2732人になっている。生物理工学と本学部以外は3年間で入館者が減少しているが、本学部では34%増加し1日の平均入館者数は169人となった。

平成24年5月1日現在の本学部の学生、院生、聴講生、そして留学生など1691名の学生数のうち1日当たり10%に相当する学生が入館していることになる。平成22年度では1日当たり学生数の約8%の利用であったものが、平成21年度から全学科新入生を対象とした図書館見学を実施し、平成23年度には「基礎ゼミ」(1年前期 必修科目)に組み入れ全学科の新入生を対象に図書館利用案内を実施、さらに館内で毎週無料の英会話教室等を開講するなどの効果により増えてきたと思われる。しかし、実際には教職員の利用もあることから学生の利用割合は10%以下であり、同様の計算をすると医学部と生物理工学部では20%を超えている。

学生一人当たりの館外貸出総数をみると大学全体で

表3 入館者数・館外貸出冊数等

	入館者数			学生一人当たりの貸出冊数			文献複写の取寄せ件数		
	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
中央	782,716	755,967	729,866	9.1	8.4	8.1	1,801	1,708	1,714
農学	162,163	146,796	109,941	6.5	7.6	7.2	499	740	483
医学	81,408	65,144	61,990	8.3	6.3	7.2	1,474	1,396	1,028
生物理工	102,690	97,171	112,827	6.9	6.5	9.1	375	282	245
工学	74,991	65,624	62,402	6.0	6.1	5.8	220	239	192
産業理工	34,241	39,521	45,706	3.5	4.4	5.1	62	174	150
合計	1,238,209	1,170,223	1,122,732	8.2	7.8	7.8	4,431	4,539	3,812

は平成22年度は8.2冊であったが、平成23年度と24年度は7.8冊に減少している。本学部は平成22年度3.5冊、平成23年度4.7冊、平成24年度5.1冊と増加している。しかし、いずれの年度も本学部の学生一人当たりの館外貸出は他のキャンパスに比べて一歩少なく、近畿大学全体の平均には至っていない。

文献複写の取り寄せ件数をみると、近畿大学全体では平成22年度から平成24年度までそれぞれ4431件、4539件、3812件と推移しているが、本学部では62件、174件、150件となっている。本学部は学生数や教職員数が少ないため、件数の比較だけで教育研究活動状況を推測することはできないが、平成24年度の取寄せ件数は生物理工学部の61%、工学部の78%に相当する件数であり、大学全体の中で最も少ない。

2-4 図書館経費

平成24年度の図書購入、新聞・雑誌、電子ジャーナルなどの資料費に関する経費を合計すると近畿大学全体で約8億1450万円である。本学部は約3230万円で、平成22年度に比べて図書館経費が増えているが、大学全体でみると3年間の経費の総額に大きな変化はない。その内訳をみると、大学全体では図書購入に24%、新聞・雑誌費に17%、電子ジャーナル費等に43%が使われ、電子ジャーナル費等の占める割合が大きい。本学部においても図書購入が22%、新聞・雑誌費が15%、電子ジャーナル費等が41%を占めている。平成22年度以降電子ジャーナル費等の占める割合は40%前後であるが、その金額は毎年増えている。

文部科学省学術情報基盤調査によると、近畿大学では平成21年度に電子ジャーナルの経費が3億円を超えて雑誌の経費を上回り、平成23年度には3億1623万8千円となったのに対し、雑誌は1億5000万円を下回り半分以下である。

3. 求められる大学図書館像

3-1 大学図書館に対する期待と課題

大学図書館は、大学における学生の学習や大学が行う高等教育及び学術研究活動全般を支える重要な学術基盤の役割を有し、大学の教育研究にとって不可欠な中核を成し、総合的な機能を担う機関の一つとして位置づけられている。近年の大学の教育研究が電子的環境を強めつつあるといった環境の変化に対して、平成22年に科学技術・学術審議会の学術情報基盤作業部会により「大学図書館の整備について(審議のまとめ)」―変革する大学にあつて求められる大学図書館像―がとりまとめられた。大学図書館の整備が必要とされている背景と課題についてまとめると以下のようになる。

第一として、「自らが立てた新たな課題を解決する能力」を中心とする学士力の育成

のため大学図書館の貢献が一層期待されるようになったこと、そして入学してくる学生はインターネットなどの情報機器が身近にある中で育っており、大学図書館としても教育や学生の要望の変化に対応する必要があること。第二として大学の研究が特許など直接的に社会に還元されることや研究業績評価の厳格さが求められていることから、大学の機関リポジトリの一層の推進が期待され、学術成果物の電子的管理と教員業績データベース等との連携がなされるようになってきたこと。第三としてインターネットの役割が重要となり、また電子情報資源の導入、管理、提供に関する対応が大学図書館に課されることとなり、利用者の情報検索技能の向上したこともあって、大学図書館の機能はより広範なものが期待されるようになっていくことがあげられている。

こうした環境下における大学図書館の課題として、電子化の進展と学術流通の変化を念頭においた情報の収集、組織化、提供のあり方の工夫、そして自発的な学習や実践を支援する「場」の提供や図書館職員等による学習支援、学生を中心とする利用者の情報リテラシー能力の向上に対する積極的な関与があげられている。

3-2 大学図書館の機能と役割

大学図書館には、学習支援と教育活動への直接の関与が求められている。学生が自ら学ぶことへの学習支援策としては、複数の学生が集まって様々な情報資源から得られる情報を用い、議論を進めていく学習スタイルを可能にする「場」であるラーニング・コモンズの整備、それを利用した教員や図書館職員、院生、学生等による自学自習支援体制の組織化、レポート等の書き方の実践的学びや各種検索ツール等の使い方のガイダンス、教員による研究会の実施への対応などによる学生や教職員の知的活動の活発化である。

さらに、適切な情報を得るために各種ツールを使いこなし、得られた情報を分析・評価し、成果を表現・発信するスキルの向上のため、情報リテラシー教育を新入生に対する初年次教育の一環として必修の授業として開講すること、そのためのカリキュラムの開発や実施を大学図書館員が教員として行い、図書館職員が教員を兼任するなどしての直接授業を担当すること、e-Learningの教材作成への関与、教材の整理・提供といった面での貢献なども大学図書館の役割として期待されている。

その他、「大学図書館の整備について（審議のまとめ）」では研究活動に必要な情報へのアクセスの確保、研究プロセスから生み出される多様な情報を組織化して次の研究活動へ活かせるようなサイクルを形成するための基盤構築、リポジトリの図書館業務としての定着、学術図書を中心とするコレクション構築、多様な学術情報への適切なナビゲーション、他機関・他地域との連携、留学生に対応するために語学に堪能な図書館職

員の確保と留学生が利用しやすい環境整備の検討などの必要性についても言及している。

大学図書館の組織・運営体制のあり方として、大学の情報戦略についてのイニシアチブの発揮、経費の確保策の策定とその実現、職員の配置や外部委託のあり方、図書館職員の育成・確保にも言及しているが詳細は割愛する。

4. 産業理工学部図書館の課題

4-1 施設等の問題

図書館のある4号館は1987年に竣工し、それから27年が経過している。その間、2006年には「高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律（バリアフリー新法）」が施行されるなど施設に求められるものも変化してきた。

4号館は他の建物から少し離れたところにあり、雨の日は傘なしで行くことができない。正門からも遠く、その正面入口はキャンパス内を移動する学生の主たる動線から離れており、昼休みや登下校時に気楽に寄れる場所ではない。

館内の移動で問題となるのは、図書館事務室内に設置された1階と2階を結ぶ階段である。1階は書籍等の保管庫として図書館員の利用を想定して作られたと思われるが、館内にエレベータはなく、階段は人がすれ違うのも困難で、路面が狭く傾斜も急で危険でもある。1階にも閲覧コーナーや検索用コンピュータを設置しているが、利用者は非常に少ない。図書館受付が2階にあるため、管理の面からも建物1階から直接図書館1階に行けるような出入口を新たに設置するのは難しい。

2階にある書架と書架に挟まれた通路は車椅子での移動には狭く、書架の角では切り返しが必要などところもある。図書館入口は引き戸の自動扉となっているが、出口は開き戸で押す必要があり、またカウンターの高さは立位用で、館内のトイレを含め車椅子を利用する学生に配慮した施設ではない。図書館事務室内の声が閲覧コーナーにまで届いてしまうのも、事務室がオープンになっている図書館のレイアウト等にかかわる問題である。

近年、大学図書館ではラーニング・コモンズの充実に力を入れている。今年開催された「私立大学図書館協会西地区部会総会」の館長懇話会でも、ラーニング・コモンズの利用開始、館内での飲み物を可として自販機やスマートホン等の充電施設の設置、カフェの運用、レポートの書き方指導の実施などが紹介されたが、古い建物を使っている大学では、そのような「場」を図書館に設けるスペースがなく頭を悩ましている。新しく作られた大学図書館では、明るく利用しやすいような場所にグループ学習室や共同学習

室といった名称の部屋を数多く設置し、図書館見学の際に廊下からガラス越しに利用している学生グループの姿を見ると、既存の建物を使ってこのような場所を設置することの限界を感じる。

産業理工学部図書館にも地域資料室を含めると10名から30名ほどが利用できる小部屋が4部屋あるが、学生グループの利用は少ない。3つのゼミ室は事務室裏の窓のない廊下に入口があり、地域資料室も扉の外から中の様子を見ることができず、いずれの部屋も使いたくなるような雰囲気ではない。廊下側から部屋の様子を見えるようにし、部屋内部の充実をはかりながらラーニング・コモンズの間として有効活用する方策が必要である。

4-2 配架等について

学生が大学図書館の利用のしにくさの理由としてあげるのが、書籍の配架に関することである。館内では日本十進分類法に基づいて配架しているが、慣れ親しんできた書店の配架とは異なり、新しい本や読んで欲しい本が書架の目立つところにあるわけではない。分野内では著者別に本が並べられているため、古い本が目立つところに、新しく出版された本が最下段の目立たないところにあつて探しそびれてしまうこともある。理系では著者を手掛かりに本を探すことがあまりないため、毎年のように改訂版が出版されるマニュアル本などを探す際に戸惑う学生も多い。本学部の図書館では新着図書、資格取得関連図書、就職関連図書、語学関連図書、新書、そして文庫などを専用の書架に配架しているが、館内の案内表示、書架の見出し等の設置方法を含めて学生の利用のしやすさの観点からさらに検討していく必要がある。

学生に書店で購入希望図書を選ばせる選書ツアーや学生の購入希望図書の要望などで迷うのは、漫画やライトノベルの類の図書の扱いである。最近では専門書を漫画にしたものも出版されている。本学部の提携校である台湾の国立虎尾科技大学では、図書館最上階の5階に漫画コーナーが設置され、貸出禁止とした多くの漫画本が取り揃えられていた。日本語の学習のために設置されているのかと思ひ書棚を覗いてみたが、日本語で書かれた漫画本は見当たらなかった。なお外国語図書のコーナーの一角には日本語閲覧コーナーが設けられ、日本で出版された単行本、新書、雑誌などが揃えられ、窓には「大売り出し」「休憩所」「焼きそば」「たこ焼き」といった日本の店で見られるような布製の小さなのぼりが飾られていた。中央図書館では、今年から密閉できるフタ付き容器の飲料に限り、館内の一部の場所で飲み物の摂取ができるようになったが、図書館の入館者を増やして多くの本と出会うチャンスを作るためには、購入する図書の範囲、居心地の良い館内の雰囲気作りなども検討課題の一つである。



写真2 国立虎尾科技大学
日本語閲覧コーナー



写真1 国立虎尾科技大学
漫画本コーナー



写真3 国立虎尾科技大学
日本語閲覧コーナーの一角

4-3 学習支援等について

本学部の図書館の図書・資料等の所蔵数は、学部の規模からみて少ないといった状況ではない。視聴覚資料等は古いものが多いものの、特に電子ジャーナルについては九州地区でこれだけのタイトル数を有する大学は少ないと思われる。

しかしながら学生数に対する入館者の割合をみると、平成24年度によりやく近畿大学全体の平均に近づいたといったところで、館外貸出冊数も少ない。新入生のオリエンテーションと「基礎ゼミ」の1コマを利用して図書館利用案内を行っているが、館内で雑誌名や書名をみてもほとんど興味を示さない学生もいる。そのため図書館員はOPAC（オンライン蔵書目録）の利用方法の説明の際に使用する検索用キーワードの選び方にも頭を悩ましている。毎年行っているデータベース等の利用に関する講習会の開催においても、学外の講師に依頼していることもあり直前まで参加者の集まり具合に気を揉み、予定した参加定員の半分以上を満たすのも難しい。しかし、参加者の中には担当講師が驚くほど専門的な質問をする院生や学生もいる。

図書館には学習支援や教育活動にも直接関与することが求められているが、学業に対する意欲や興味に大きな個人差がある学生の集団を相手にするのは教員でもなかなか難しい。研究活動は整備された電子ジャーナル等の利用で事が足りるようになってきたため、教員も図書館に行くことが少なくなった。そのため講義室や大学事務室から離れたところにいる図書館員が教員と話をする機会が減り、委員会活動以外のところで学生との状況や研究活動について情報交換する場がほとんどなくなっている。利用者を増やすためには図書館の開館時間についての検討も必要と思われるが、まずは教員との情報交換ができる場を設けることから始める必要があると思われる。

5. 最後に

図書や雑誌の電子化が進む中で、出版社はパッケージにして電子ジャーナル等の売り込みをはかり、図書館はパッケージに含まれる不要なジャーナルまで買わされてしまうことに対処するといった経費削減のための仕事が増えてきたように感じる。図書館が所属する協会などが代表して行っている価格交渉にかかわるメールが図書館宛に数多く届いている。

電子化された情報は製本代がかからず、保管スペースも不要で、目的とする資料や論文等の検索には大変便利である。しかし、発行された順に雑誌のページをめくる中で巡り合う思わぬ出会いの機会が失われる危険も大きい。特に学生が論文のテーマを選ぶと

きなどは、研究動向を把握するためにも書籍等を手にとつて開き、またその周辺にある目的外の書籍にも目を向けてほしいと思っている。

毎年のように値上がりする電子ジャーナル等を揃えるために既存の雑誌の購読や図書の購入を控えることになる、本との出会いがますます失われてしまうことになる。学習支援や教育活動に関する体制づくりを急がないと、図書館が学習室にコンピュータを並べただけの場所になってしまっているのではないかと危惧している。

図書館が国などから求められていること、そして産業理工学部図書館の現状と課題についてまとめてみた。図書館のハード面とともに、ソフト面の充実のためにご意見をお聞かせいただければ幸いである。